

家事の文化：オランダにおける 主婦の仕事 母 の仕事 とその変容

著者	中谷 文美
雑誌名	いま構築されるアジアのジェンダー：人間再生産のグローバルな再編成
巻	36
ページ	13-31
発行年	2010-03-31
その他のタイトル	The Culture of Housework: Women as Mothers and Housewives in the Netherlands
URL	http://doi.org/10.15055/00002454

家事の文化： オランダにおける〈主婦の仕事〉〈母の仕事〉とその変容

中谷文美

岡山大学

I 家事の多様性

家事という言葉から私たちが思い浮かべる代表的な行為といえば、さしずめ「炊事、洗濯、掃除」といったところだろう。しかし、洗濯は洗濯機に衣類を移し、スイッチを入れるだけでは終わらない。洗いあがった洗濯物を干し、取り入れ、必要に応じてアイロンをかけ、たたみ、決まった場所に収納しなくてはならない。たとえば夫婦の間の家事分担を尋ねるアンケート調査などで、「夫婦のどちらが、どれくらいの頻度で洗濯をするか？」という質問を見かけることがあるが、こうした単純な問いだけでは、現実の作業分担の実態は見えてこない。

さらに、そのような調査ではめったに出てこない、より細かな作業、たとえば洗剤、調味料などの日用品のストック管理、光熱費・電話代など各種の支払、回覧板を回すといった行為も、日常生活を送る上で必要な家事の一部である。「家事は単一の活動ではない」と書いたのは1970年代初めに家事や主婦研究の先鞭をつけたイギリスの社会学者 Ann Oakley だが、たしかに家事とは、異なるタイプの技能を要する、種々雑多な業務の集積である。¹ このことは、家事に相当する行為が専門業者に外注された場合、炊事→レストラン・コンビニ弁当、掃除→クリーニングサービス、洗濯→ドライクリーニング、などと異なる業種にまたがることから明らかである。

また、炊事、洗濯、掃除のいずれをとっても、家屋の構造、道具や技術、電気・水道といった基本的設備の有無や生活習慣の違いなどが、具体的な作業の内容や費やす時間を大きく左右するはずだ。文化人類学が調査対象としてきた多くの社会において、調理そのものを始める前に、遠方の井戸や給水タンクまで水くみに行ったり、燃料用の薪を集めたりしなければならない状況は珍しくない。牧畜を生業とする人々の間では、女性が家畜の乳を搾り、それをヨーグルトやバター、チーズなどの乳製品に加工する。主食となる雑穀を粉にするまで臼でつく、あるいはサゴヤシの幹の髓からでんぷん質を取り出すために多大な労力と時間を要する社会もある。かつて私が訪れたバングラデシュの農村では、これからカレーを作ってご馳走してあげますよと言われて待っていると、子どもたちが庭中を走り回って放し飼いの鶏を1羽つかまえ、羽根をむしりとるところから作業が始まった。

もともと家事とは、生きることに直結した、いわば生産と消費の両方の側面を含んだ行為

1 オークレー 1980、p. 55。

なのである。

日本の都市のサラリーマン家庭であっても、既製服や電化製品が出回り始める昭和30年代までは、子どもの肌着を手縫いしたり、水道代を節約するために団地の敷地内の井戸で水を汲み、タライで洗濯をし、食費を浮かせるために庭で野菜を栽培したりする「生産的な」主婦の姿がみられた。² つまり、同じ社会の中でも、時代の変化に従って家事の内容や求められる水準は大きく変化しうる。その場合、すでに触れたような家屋の構造、道具や技術、電気・水道などの有無、といったインフラストラクチャーやテクノロジーの変化が大きな要因となることは間違いないが、もうひとつ重要な点がある。

それは、イギリスの歴史学者 Leonore Davidoff が先の Oakley とほぼ同時期に発表した家事に関する論文で述べたように、「家事は文化の一部」と考えることができるということだ。³ いいかえれば、家事とは何か、それを誰が担うべきか、そしてどのように遂行されるべきかといった問題は、文化的・歴史的特定性の中で規定される。

そのうえ、それぞれの社会で家事として大きく括られる行為の中には一定の序列があり、家事のどの部分をとくに重要視するか、という点にはかなりの違いがあるのではないだろうか。したがって、一口に家事といっても、その中でとくに象徴的な家事、つまり家事としてくくられる一連の作業の中でも中核的存在とみなせるような行為を社会ごとに、あるいは時代ごとに特定できるのではないか、というのが本稿の出発点である。

たとえば現代日本の主婦がこなす家事の中でとくにエネルギーを傾けているもののひとつは、子どものための弁当作りではないだろうか。生協などのカタログには彩りがよく、かわいい弁当を作るためのグッズが数多く紹介され、インターネット上のブログには人気キャラクターを模したり、文字を入れたりと手の込んだ弁当の写真が山と並ぶ(図1)。興味深いことに、海外在住の日本人の母親たちも、通常子どもが地元の学校に通うときには簡単なサンドイッチなどですませているにもかかわらず、日本人向けの補習校に行く土曜日には、海苔巻やタコ型ウインナーなどの詰まった、いわゆる日本のお弁当をわざわざ作って持たせるという話をよく聞く。アメリカの文化人類学者 Ann Allison は、この弁当作りには「子どもに栄養のある食事を与えるという、実用的かつ機能的な意義をはるかに超えた関心が注がれて」おり、「女性がよき母であることの証」となっているとも指摘した。⁴ 無数のブログに掲載されているような凝ったキャラ弁(キャラクター弁当)を実際に毎日作って持たせる母親は少数派であるかもしれない。それでも弁当作りや、あるいは受験生の夜食作りなどが母として遂行する家事の中核を占めていることは間違いないように思える。いいかえると、家事の一つである弁当作りは、＜主婦の仕事＞である以上に、＜母の仕事＞としての象徴的意味を持っているのである。

このことは、1970年代のイギリスで主婦を対象とするインタビュー調査を行った Oakley の議論とも呼応する。Oakley は、「子どもの世話は好きですか？」という問いかけに対して

2 田中・鈴木 1999, pp.102-103。

3 Davidoff 1991 [1976], p. 59.

4 Allison 2000, p. 83.



図1 生協カタログに並ぶ「かわいい」お弁当のための小道具

ある女性が「はい、でもおしめがねえ。手で洗うんですけど、真っ白に仕上がらないといやなんです」と答えた例を引き、女性が家庭内での再生産労働に従事する際に期待される主婦としての役割と、母としての役割はしばしば混同されると述べる。その結果、「育児はすなわち家事であるということになる」。⁵しかし、具体的にどのような家事行為が育児と結びついて象徴的な意味を持つかは、社会によっても時代によっても異なるだろう。

では、そもそもなぜ家事を主題とするのか。一つには、生計を維持するのに必要な賃金を稼ぎ出す労働、つまり有給労働こそを「仕事」とみなす近代的あるいは生産中心主義的労働観を相対化する上で、「仕事」と対比的にとらえられたり、「仕事でないもの」とみなされたりする領域に目を向けるという意味がある。それと同時に、労働の現場におけるジェンダー格差の現状、あるいは既存のジェンダー規範が職域編制にもたらす作用などをめぐる従来の研究蓄積の中で、家族内性別分業決定論、つまり労働市場における女性の地位や役割を家族内性別分業と直結させて論じる方法論への疑問が出てきたことを踏まえている。

女性労働者が労働者であると同時に家庭責任を負う存在であること、職場と家庭に対する二重の関係性を同時に抱え込んでいることが女性労働者の特質であり、だからこそ女性は二級市民ならぬ二級労働者としての扱いに甘んじることになるのだという指摘自体はむしろ重要であるが、そこで話が終わってはいけないということである。社会学者の木本喜美子は、このような問題意識に基づいて、たとえばジェンダーに基づく職域分離を考える際にも、家族内性別分業との連続性にとらわれすぎることなく、職場内での労働過程でのメカニズムを

5 オークレー 1980、p. 194。

分析していく方向を提示しているが、⁶ 私自身は、女性労働の分析にあたって前提とされてきた家族内の性別分業それ自体のあり方をもう少し丁寧に見ていきたいと考えている。

1970年代にイギリスを中心に起こった家事労働論争は、これまで見えない労働に過ぎなかった家事を、労働というカテゴリーに組み入れ、しかもそれを無給労働、不払い労働として可視化したという点では大きな意義があった。しかしここでも、あるいは日本でいわゆる主婦論争においても、家事という営みの多様性については十分考察されてこなかったのではないだろうか。

したがって、この報告の目的は、その日常性ゆえに「家事」としてひと括りにされがちな家庭内の再生産労働を、個別社会の文化的文脈に照らして再考してみることにある。具体的には、「家事とは一体どのような労働なのか」という問いをまず立てた上で、私たちが自明視している家事の中身を＜主婦の仕事＞・＜母の仕事＞という観点から切り分け、「誰が」「いつ」「どのように」その行為を遂行することになっているのか、それらの行為の間にどのような序列があるのか、といった点を検討してみたい。

II オランダ社会における家事の位置づけ

本稿で具体的な事例として取り上げるのは、オランダである。本シンポジウムが対象とするのはアジア地域であるが、そこでテーマの一つとして挙げられている「主婦化／脱－主婦化」を考える上で、近代前期の段階で女性の活動領域としての家内空間が成立したヨーロッパの事例を参照することも無駄ではないだろう。とくにオランダは、既婚女性の圧倒的多数が当然のように家事・育児に専念する時代を経て、いまやEU平均を上回る女性労働力率（2008年時点で71.1%）を誇る状況となった。そのオランダにおいて、家事をめぐる一般的認識や実践、とりわけ女性たちの日常にとって家事が持つ意味や重みは歴史的にどう変化してきたのだろうか。

先行研究を概観する限り、オランダ史の中で家内領域およびそこで遂行される家事とその担い手をめぐる状況が重要な変化を遂げたと考えられるのは、以下の3つの時点である。第1はオランダが新興の共和国として経済的繁栄を誇り、都市部で台頭した市民層を中心に公私の分離が進んだといわれる17世紀、第2は家事の合理化・プロフェッショナル化が進み、近代的な専業主婦像が形成された19世紀、そして第3は、既婚女性が主婦となることが階層差にかかわらない平均的实践となった第二次世界大戦終了後10年あまりの時期である。本章では、その3つの時点それぞれについて、家事の社会的・文化的意味、具体的内容とその担い手を先行研究に拠りつつ検討しておこう。

1 17世紀：内外の区分と女性領域としての家内空間

歴史的に「黄金時代（Gouden Eeuw）」と名づけられた17世紀は、オランダ史においてさ

6 木本 2005。

さまざまな点で特別な意味を持つ時代であるが、とくに近年、この時期大量に描かれた風俗画 (genre paintings) を素材として市民の日常や家族生活に光を当てた研究が数多く出ている。⁷ 中でも社会史家の Simon Schama、そして美術史家の Wayne Franits は、それぞれ膨大な数の絵画と当時の出版物を手がかりに、夫婦関係のあり方や期待される男女の社会的役割がどのようなものであったかを詳しく解き明かした。

たとえば図2は、医師であり政治家でもあった Van Beverwijck が 1639 年に著し『女性という性の優越性について』の挿絵として、上記2人の著作の両方に登場する図版である。紀元前5世紀の彫刻家フィディアスが製作したという亀の上のヴィーナスをモチーフとし、背景に耕す男と屋内で糸を紡ぐ女を配したこの版画では、家内の諸事を取り仕切り、家を自らの居場所と定める女性を「甲羅を背負う＝家とともに動く」亀になぞらえたとされる。⁸

戸外で生活の糧を得るための仕事に従事する夫と、家の中にとどまり、掃除・食事の支度・子どもの世話に加えて使用人の監督という任務をつかさどる妻との間の明確な分業を夫婦関係の基盤に置く考え方は、先の Van Beverwijck のほか、17世紀を通じて人気の高かった著述家・道徳家の Jacob Cats の著作にも繰り返し登場する。⁹ むろん夫婦間の分業それ自体は、当時のオランダに特有の考え方とはいえないし、豊富に出回って



図2 亀の上に乗る女性 (Kloek et al. 1994, p. 71)

た結婚生活や家庭運営の指南書の類には、イギリスの同様の出版物の翻訳も多数含まれていたという。¹⁰ ただし次の2つの点については、同時代の周辺諸国とは異質な、オランダ固有の特徴が伺える。

まずは、住まいの外と内との間に明確な境界を引く意識が浸透しつつあったという点であ

7 Van Deursen 1991 [1978], Schama 1991 [1987], Franits 1993, Kloek et al. 1994, トドロフ 2002、尾崎 2008、小林 2008 など。

8 Franits 1993, p. 68.

9 Van de Pol 1994, p. 73. Cats による『結婚 (Huwelijk)』という韻文形式の著作は、少女時代から老女期にいたる6段階のライフステージのそれぞれについて、女性のあるべき生き方を説いた書物として人気を誇っていた。豪華な装丁のオリジナル本のほか廉価版も発売されており、17世紀のうちに21回も版を重ねたという (Franits 1993, p. 5)。

10 Franits 1993, p. 64.

る。オランダ風俗画に頻繁に描かれた室内は、危険に満ちた外界と対比される清潔で安全な空間であった。¹¹ 現実には商人、貿易商、医師、公証人といった自営業者を中心とする都市市民層にとって、事業や商取引の大半は住居の中で行われるものだったが、家族の居住空間と仕事空間とはきっちりと分けられていた。¹² そして家族の住まいとしての家内領域は、妻が家事全般を取り仕切り、使用人の素行に目を光らせながら整理整頓を徹底し、清潔さを保つべき場であった。Catsによる指南書のロングセラー『結婚 (Huwelijck)』は、家の中のすべてのモノが洗い清められ、あるべき場所に収まっているような秩序を維持することの重要性を説き、¹³ 同じく人気の高かった『経験豊富で博識のオランダ人家政管理者 (De Ervarene en Verstandige Holladsche Huysshoudster)』というマニュアル本では、週間の清掃スケジュールとその内容が事細かに記載されていた。¹⁴

このように執拗なまでのきれいさ・清潔さの追求が、もう一つのオランダ的特徴である。17世紀オランダの社会状況に関する研究の多くは、他国からの旅行者の観察記録に頻繁に言及しているが、中でも Schama は、数多くの旅行記に、オランダ人が道路や家の内外を丹念に洗い清め、磨き上げる様子が記載されていることに注目した。当時のヨーロッパ内の旅行者は他国の第一印象として清潔さの度合いを引き合いに出すことが多かったというが、¹⁵ ことオランダに関しては、「度を越したこざれいさ (excessive neatness)」 「清潔さの完全な奴隷 (perfect slaves to cleanliness)」とイギリス人が記すほどの徹底ぶりが広く知られていたようである。¹⁶

オランダ人にとってこの清掃という行為は、物理的な意味での健康や衛生への配慮を超えて、道徳的な意味を帯びるものだったと Schama は分析する。ゴミや泥を一掃することは、混沌とした状態に区切りをつけ、他を排し、オランダ社会を神に選ばれた存在として差別化することを意味した。したがって家の中を徹底的にきれいにするという妻の任務は、外界に満ちた邪悪なるものの侵入を防ぎ、安らかな内なる世界を守ることと同義であった。¹⁷

社会全体を見れば、法的に女性は男性に従属する存在であり、政治などの公的世界から制度的に排除されていた。しかし結婚生活においては、夫は外、妻は内という空間的規範の下で、天職 (beroep) として与えられた家内の職務を全うする限り、妻は対等とはいえないまでも夫の伴侶として相互補完的な役割を担う存在であり、夫はその役割に敬意を払わなければならなかった。¹⁸ さらに、妻が君臨するその家庭は「権威の基盤にしてその源泉」であり、

11 Van Daalen 1993, p. 11, トドロフ 2002, p. 31.

12 Van Daalen 1993, p. 10, Schama 1991 [1987], p. 391.

13 De Mare 1999, p. 18.

14 Schama 1991 [1987], p. 375. このマニュアルには、曜日ごとの清掃プログラム（月曜と火曜は客間と寝室の塵払いと磨き仕事、木曜はごしごし洗い・こすり洗いの日など）に加え、枕は毎日膨らませて羽毛に空気が入るように立てておくこと、床は灰汁で、壁は石灰とテンペラを混ぜて拭く、といった具体的な指示が記載されている。

15 Laurence 1994, p. 130.

16 Schama 1991 [1987], p. 375ff.

17 Schama 1991 [1987], pp. 380, 391.

18 Franits 1993, pp. 68, 130, Schama 1991 [1987], p. 425.

コミュニティ、さらには国家の縮図と位置づけられた。よって家庭の平和は社会全体の安定と基盤を保障するものとみなされたのである。¹⁹ つまり、女性のいるべき場としての家内領域が、男性の活動の場である公的世界と区別され、並置されたばかりでなく、後者以上に優れた美德を体現するという価値を付与されていた点こそが17世紀オランダの特異性を示していたといえるだろう。²⁰

2 19世紀：「主婦業」の成立と家事をめぐる知識の体系化

17世紀オランダの風俗画に登場したのは多くがビュルヘル burgher と呼ばれる、家や資産を備えた新興市民層であり、廉価版が合わせて発売されていたとはいえ、結婚生活や女性役割にまつわる道徳を説く数々の書物の読者もまた、その大半は「持てる人々」であった。同時代の庶民の生活に光を当てた Van Deursen が史料調査に基づいて断言するように、さまざまな職人を含む労働者の世帯の場合、夫1人の稼ぎではどうい家族を養うことはできなかった。したがって、庶民の妻たちは糸紡ぎ、洗濯、掃除といった賃仕事をこなし、娘たちは織物工場で働くか、住み込みの家事使用人となった。²¹ したがって、家内領域や家事のあり方をめぐる前章の議論は、基本的に限られた階層にあてはまるものだったといえる。

その後都市化・産業化が進み、社会全体が大きな変化を経験した19世紀になってもなお、家事をめぐる観念は、社会階層によって大きく異なっていた。社会の上層、たとえば貴族や政府高官、工場主、大農場主などの裕福な家庭では多くの使用人を抱え、女主人は使用人の監督者という役目を負っていた。一方、職人や工場労働者の妻たちは、17世紀同様、夫の少ない賃金を補填するために自ら戸外で働く必要があったが、むろん使用人を雇う余裕はなく、賃労働と家事労働の二重負担を強いられる状況にあった。そして中間層、つまり小規模の自営業者や親方や小農の妻たちは、家業を手伝う傍ら、女中の助けを借りて家事を行っていたとされる。²²

家事の中でも掃除に関する水準の歴史的変遷を考察した Oldenziel らは、19世紀末の重要な変化として、近代的な専業主婦像を实践する層の登場を挙げている。それは、行政官、教育者、公務員や工場監督者などの妻や娘達で、品格を守るために戸外就労をつつしむ一方、上位階層のように大勢の使用人を雇う経済的余裕はないため、家庭内で家事に専念した女性たちであった。²³ ここで重要なのは、そうした女性たちが専業主婦としての自覚を持ちつつ、より合理的な方法でより多くの家事を自ら遂行するようになっていったという点である。

19世紀は、技術の進歩や衛生観念などの普及を背景に、家事の合理化、プロフェッショ

19 Franits 1993, p. 213n25, p. 384, Schama 1991 [1987], p. 391.

20 家の内側の世界がその外と完全に切り離され、独自の情緒的価値を帯びる空間といえたかどうかについては議論の余地がある。De Mare[1999]は、家内領域に公的世界とは対比的な、たとえば温かく親密な家族関係が展開される場という性格が与えられるようになる（つまりドメスティシティという概念が成立する）のはあくまでも19世紀以降のことであり、17世紀の時点では、家の内外にはむしろ共通の行動規範が適用されたと指摘している。

21 Van Deursen 1991 [1978], pp. 8-9.

22 Oldenziel & Bouw 1998, p. 15.

23 前掲書。

ナル化が進んだ時代でもあった。とりわけ 19 世紀後半には、家事の知識は母から娘へと受け継がれるものではなく、専門的な知識と技術を要するものとみなされるようになり、数多くの百科事典的マニュアル本が出版された²⁴。それ以前から存在していた家政百科的な出版物との違いは、インフォーマルに蓄積され、伝えられてきた経験的知識の列挙ではなく、体系化され、科学的な根拠に基づいた知識の提示にあった。さらに、1891 年にはアムステルダムに最初の家政専門学校が設立され、その後オランダ中に広がっていく。つまり、体系化された家事の知識と技法は、書物や学校教育を通じてフォーマルに伝達すべきものとなり、独身女性は妻・母・主婦としての将来の任務に備えてフォーマルな家政教育を受けることが望ましいと考えられるようになったのである。²⁵

こうした家政専門学校の講師が執筆することの多かったといわれる各種の家政マニュアルが想定していたのは、職場での仕事に従事する夫と、家の中ではあっても夫の職場と同じような規律に従って、知識や技術を駆使した家事に従事する妻の分業であった。つまり、主婦であることは意識的に選択された職業に就くことを意味し、女性たちは手だけでなく、頭も使って家事を遂行することが求められていた。²⁶ 苦労やトラブルの多い職場から帰宅する夫に対し、その職場とは対照的な、「穏やかさに満ちた場所である〈家庭〉を提供する」ことが妻の役割だという記述もみられる。

また、家の中を整理整頓し、清潔さを保つことの重要性は依然として強調されており、家事の中でも重要だったのは窓磨きであった。ぴかぴかの窓は、家の中もまた十分に清潔な状態に保たれていることを示し、その家の住人の社会的地位につながる象徴的意味を持っていた。²⁷

3 第二次世界大戦後：専業主婦の普遍化

しかし、このように女中の手を借りながら家事をこなす主婦の姿は、20 世紀に入ってさらに変化を遂げていく。家と家族のケアに全面的に献身する専業主婦であることが、階層差を超え、しだいに社会の平均的な実践として広まっていったからである。

たとえば 20 世紀初頭の時点で郵政関係の業務についていた女性公務員の大半は未婚女性であったが、少ないとはいえそこには既婚者も含まれていた。しかし 1904 年に、就業資格を持つのは未婚女性のみという王令 (Koninklijk Besluiten) が出されたため、女性公務員は結婚と同時に退職を余儀なくされるようになった。²⁸ 「名誉ある解雇 (eervol ontslagen)」と呼ばれたこの措置は、その後、女性の多かった教員や看護婦などといった職種にも適用されていく。こうした動きも既婚女性が専業主婦となることは当然という風潮に拍車をかけたといわれるが、1937 年に既婚女性の全面的な就業禁止を定める法律案を提出した当時の社会間

24 Groffen & Hoitsma 2004, p. 16.

25 Wilke 1998, p. 61.

26 Van Daalen 1993, p. 12.

27 Op. cit., p. 13.

28 Van Eijl 1994, p.53.

題担当相 (Minister van Sociale Zaken) は、次のような演説をしたという。

自然の秩序にしたがえば、男性は一家の稼ぎ手であり、女性の任務は家族の世話であります。一般に女性がこの任務を逃れ、異なる仕事の領域を求めるとすれば、それはよこしまなことと言えます。29

このような夫＝稼ぎ手、妻＝主婦という夫婦間の明確な分業モデルは、二つの世界大戦後もいっそう広く深く社会に浸透していった。その背景には、イギリスやアメリカのような規模で戦時労働力としての女性の動員が起こらなかったこと、戦後のオランダは好景気が続き、夫1人の収入で家計が賄えるようになっていたこと、さらに20世紀前半から進んだ「柱状化 (verzuiling)」と呼ばれるオランダ特有の社会構造の中で、特定のイデオロギーが階層差を越えて浸透しやすい状況が生まれていたことなどが主要な要因として働いたといわれる。30

さらに第二次世界大戦終結直後の1945年～55年は、政府や各政党が「家族政治」を展開し、家族、とりわけ、夫が稼ぎ手、妻が専業主婦という夫婦の組み合わせから成る核家族をモデルとした上で、家族の重要性を強調する時代でもあった。そんな中、どんな階層の女性であっても家族への献身や母性を強調する文化を共有し、結婚後は主婦として家庭に入ることが当然の選択と考えられるようになっていた。実際に専業主婦率は高く、1947年の既婚女性の戸外就労率は2%、1960年には7%だったという。4歳未満の子を持つ女性にいたっては、戸外就労者はわずか0.6%であった(1960年)。31 むろん統計上主婦とカウントされていても、たとえば家で内職をする、あるいは他の家庭に家事補助者として通う女性などは少なからず存在したと考えられる。しかし強固な社会通念の広がり背景に、そうした存在はますます「見えにくく」なっていったといえるだろう。実際にこの時代、結婚しない女性はまれだったし、夫と妻の役割分業を前提とした家族モラルが強調される中で、既婚女性が働こうとすれば多くの困難に直面したことは間違いない。

Ⅲ 主婦の仕事

では、戦後オランダ社会にあまねく浸透したかにみえる夫婦分業モデルにしたがって専業主婦となった女性たちは、どのような日常を過ごしていたのだろうか。

まず家事に費やす時間は非常に長く、1956年の調査によれば1日あたり12時間から14時間、1週間あたり70時間以上に及んでいたという。32 家事使用人を雇用する家庭はすでに激減しており、1960年時点では自営業者を中心に4%未満に過ぎなかった。33 経済的余裕の

29 Plantenga 1998, p. 53.

30 Bussemaker 1998, Schuyt & Taverne 2004. 戦後の夫婦間分業モデルの普及の背景については、Nakatani 2008を参照のこと。

31 Oldenzijl 1998, p. 16, Moree 1992, pp. 102–103, Schuyt & Taverne 2004, p. 259.

32 Groot & Kunz, 1984, pp. 119–120, Tjidsens 2000, p. 10に引用。

33 Tjidsens 2000, p. 10.



図3 オランダの開放的な窓辺

ある家庭は、住み込みの女中に代わって、通いの掃除婦やお手伝いさんを週数時間ずつ依頼するようになっていた。

1955年に実施された主婦対象の生活時間調査によると、この当時の主婦は曜日によって重点的に取り組む家事内容が異なり、それが一定のパターンを確立していたことがわかる。月曜日は洗濯、火曜日はアイロンかけと繕いもの、金曜日は念入りの掃除、土曜日は買い物といった具合である。³⁴ ちなみに約10年後の1964年に実施された詳細な生活時間調査では、主婦の労働時間が週当たり平均60時間に減少していたが、依然として、月曜日が洗濯日、金曜日が家の中の大掃除、土曜日が買物、という曜日別のパターンを読み取ることができる。³⁵

1954年に刊行された「家政ハンドブック (handboek voor huishoudkunde)」という本には、2歳から8歳までの5人の子を持つ母親の詳細な日課が記されているが、この家の場合は、週3回通いの女中を雇っているにもかかわらず、女中と分担しながら主婦自身があらゆる家事に従事している様子が伺える。³⁶

これらの家事の中で象徴的な意味でも実際にも重要視されていたのは、やはり窓磨きや窓辺の装飾であった。窓磨きは以前から重要な意味を持っていたが、とくに1950年代から大きく開放的な窓を設けた建築が流行ったことで、まるで温室のように通りから中の様子をのぞき見るのが可能になった。その窓をカーテンで覆うことなく逆に磨き上げ、外に向けて窓辺を飾ることが、潔白性と開放性の誇示につながったという。その後60年代、70年代を通じて、この大きな窓辺の装飾は主婦の重要な仕事となっていた。窓辺は多くの鉢植え、手づくりの手工芸品、あるいは旅行先の土産物などが趣向を凝らしてディスプレイされる空間

34 Groffen & Hoitsma 2004, p.22.

35 Philips Nederland 1966.

36 Groffen & Hoitsma 2004, p. 22.

であった（図3）。ちなみに1964年の全国調査では、都市居住者の65%が夜もカーテンを引かないと回答している。³⁷

ところが1980年代に入ると、若い世代を中心に、窓の装飾にはあまり関心が払われなくなっていく。新たにブラインドが導入され、昼間からブラインドやカーテンが下りている家も増えていく一方で、窓拭きが好きではない家事の筆頭に上がるようになる。Irene Cieraad は、女性の領分と意味づけられていた窓辺の装飾の放棄は主婦の地位の周縁化を象徴するものであり、ブラインドのかかった窓は「モダンなオランダの家庭イメージを作り出し、そこでは妻は家事とパートタイム勤務を両立させている」と述べる。³⁸ たしかに1980年代は、既婚女性を含め、女性の就労が急増した時期であった。1971年には38%だった女性（15～64歳）の労働力率が1990年には53%となっている。³⁹ それとひきかえに家事に割く時間は年を追って減少していった。

表1は5年ごとに実施されている大規模な生活時間調査の結果をまとめたものであるが、女性の場合、無給労働の中でも週当たりの家事時間数が1975年の30.8時間から2005年の23時間へと7.8時間分減少している。それに代わって、有給労働がこの30年間で9.4時間増加していることが注目される。ただしここで興味深いのは、子どもやその他の家族成員の世話という項目に関しては、家事と同様に減少することなく、むしろ増えているという点である。また男性のほうはわずかではあるが、家事時間が増え、子どもの世話時間も増えている。

表1 オランダ人男女の生活時間の変化 1975～2005年（週あたり時間数）（Portegijs et al. 2006, p. 102）

	1975	1980	1985	1990	1995	2000	2005
【女性】							
無給労働	42.6	44.4	43.3	39.1	37.3	35.5	34.7
家事	30.6	30.2	28.8	26.1	25.3	23.9	23.0
子ども・その他の家族成員の世話	4.6	5.2	4.7	5.0	5.1	5.0	6.0
D I Y活動	5.7	7.1	7.5	5.6	5.0	4.6	3.8
親族 / 非親族への援助	0.9	1.0	1.1	1.1	1.2	0.9	0.8
ボランティア活動	0.8	0.9	1.1	1.1	1.2	0.9	0.8
有給労働	3.9	4.4	5.9	7.7	9.3	12	13.3
【男性】							
無給労働	17.4	18.5	20.4	19.7	21.1	20.0	20.0
家事	8.5	8.8	10.3	10	11.2	11.4	11.3
子ども・その他の家族成員の世話	1.9	1.9	1.8	1.9	1.9	2.1	2.8
D I Y活動	4.9	5.5	5.6	5.2	5.2	4.3	4.0
親族 / 非親族への援助	0.7	0.7	1.2	0.9	1.2	0.9	0.7
ボランティア活動	1.5	1.6	1.5	1.8	1.7	1.4	1.3
有給労働	27.3	25.6	25.1	27.3	28.6	29.8	29.0

37 Cieraad 1999, p. 38ff.

38 Cieraad 1999, p. 49.

39 Henkens et al. 1993.

このように、育児関連時間がやや増加する一方で、女性が純粋な家事に割く時間が大きく減少した背景には、すでに触れたように女性の就労の拡大がある。

オランダにおいて、結婚と同時に仕事を辞める女性が圧倒的に多かった状況が一変し、次第に就業を継続したり、あるいは一旦退職した後再び働き始める女性の数が急速に増えたのは80年代から90年代にかけてであった。さらに2000年代に入ると、結婚や出産によって就労を中断する女性が極端に減る、という状況が生まれた。こうした変化の背景には、1980年代以降に矢継ぎ早に展開された労働政策と雇用環境の変動がある。とくに年金制度や所得税の個人単位化、パート・有期・臨時のフレキシブルワーク推進につづいて1996年11月の労働法改正によるパートタイム労働とフルタイム労働の均等処遇化、2000年7月の「労働時間調整法」でパートタイムとフルタイムの転換が可能になったことなどが、パートタイムで就労を継続しながら子育てと両立するという働き方を選ぶ女性の急増をもたらしたのである[Nakatani 2010]。

その結果、家事の中でもとりわけ掃除や炊事の外注化が進みつつある。上述のように家事使用人のいる家庭は戦後から1960年代にかけて一旦激減したが、既婚女性の就業率が上昇し始めた頃から、再び家事補助者を雇用する家庭が増加した。世帯主の年齢が18～65歳である世帯を対象にした全国調査の結果によると、1980年には対象世帯の6.3%、1995年には11.6%、2000年には12.3%が通いの家事補助者を雇用していた。⁴⁰ さらに需要と供給のバランスが取れていないために、希望はしていても、現実に家事補助者を雇うことができない世帯は相当数あると見られている。

一方、どういう状態を「十分にきれい (schoon genoeg)」とみなすか、という規範はここ100年で大きく変わったといわれる。たとえば、家中を地下室から天井まで徹底的に掃除し、絨毯を屋外で叩いて干す「春の大掃除 (voorjaarsschoonmaak)」はもはや季節の風物詩ではなくなった。⁴¹ また世代によって「きれいさ」の規準が異なることは、老人ホームでのインタビューからも明らかになっている。かつて自分の家を「ぴかぴかできれいな状態」にすることそれ自体に喜びと誇りを感じていた、高齢の女性たちは、若いスタッフがおざなりな掃除をただけで「十分きれい」とみなす姿勢に不満を持っているという。⁴²

つまり、家の中や窓を磨き上げることが主婦である女性の能力の証でもあり、誇りの源泉でもあった時代に比べると、家事に費やす時間が減少する一方の現代においては、主婦という存在や主婦がすべき仕事というものが次第に周縁化されている状況を読み取ることができる。

40 De Ruijter 2004, p. 227.

41 Oldenziel & Bouw 1998, p.27.

42 Van Daalen 1993, p.15.

IV 母の仕事⁴³

ところが、時間配分の推移にも示されていたように、子どものケアをすること、つまり「母の仕事」の重要性は薄れているとはいえない。雑誌記事などで女性の望ましい生き方などが取り沙汰されるときには、もはや家事に専念するか、戸外就労かという選択ではなく、家にいるフルタイムの母か、働く母かという選択の問題として提示されることのほうが圧倒的に多い。

では、「母の仕事」の具体的な中身は何であろうか。

表2 既婚（同棲者を含む）女性の育児時間の変化 1975～1995年（週あたり時間数）

子どもの年齢	(Niphuis-Nell 1997, p. 143)					
	主婦（非就労女性）			就労女性		
	1975/1980	1985	1995	1975/1980	1985	1995
0～5歳						
子どもの世話	15.9	20.4	22.4	13.4	15.5	16.8
身の回りの世話	10.1	12.8	11.8	7.8	9.5	8.7
しつけ・遊び	5.8	7.5	10.6	5.7	6.0	8.2
6～14歳						
子どもの世話	5.8	6.7	8.1	5.1	5.6	5.4
身の回りの世話	3.0	3.1	2.9	2.3	2.5	1.9
しつけ・遊び	2.8	3.7	5.3	2.8	3.1	3.5

表2は女性の育児関連時間の経年変化を内訳とともに示したものであるが、専業主婦の母親も就労している母親も、子どもの世話にかかる時間はこの間増加している。だが内訳を見ると、身の回りの世話に比べ、しつけ・遊びというカテゴリーに入る世話の時間の増加が目立つことが注目される。ここでしつけ・遊びと訳した「kinderbegeleiding」とは、そばにいて教え導くというニュアンスの言葉である。つまり、食事を与えたり、寝かしつけたりといった物理的な世話以上に、一緒に遊んだり精神的なケアをしたりという側面が重視されるようになっていくことがわかる。

もともとオランダにおける定型化された母イメージとして繰り返し言及されるのは、「紅茶ポットとクッキーの傍らで子どもを待つ母」という決まり文句である。雑誌記事などにも頻繁に出てくるほか、私の友人の小学生の息子が母の日に学校から持ち帰った工作は、紅茶ポットを象った色紙に本物のティーバッグと母についての詩のコピーが貼り付けたものであった。

かつてほぼ全員が専業主婦だった母親たちは、実際に子ども達が学校から帰ってくる時間

43 第4章の記述の大半は、2002～2008年に数回に分けて実施したオランダでのフィールド調査に基づいている。一部の調査は、科学研究費補助金（基盤B）「＜仕事＞の多様性と変容に関する人類学的研究—ジェンダー視点による国際比較」（代表者：中谷文美）によって可能になった。

に合わせお茶の用意をして待っていた。先に引いた1954年の「家政ハンドブック」に記載されている主婦の日課にも、学校から戻った子どもたちと一緒にお茶を飲む時間が入っている。しかし、「働くお母さん」が非常に多くなり、放課後学童保育に通う子どもも増えている現代オランダでは、「紅茶ポット」も過去の話としてノスタルジックなトーンで語られることが多い。1960年代生まれの私と同世代の友人たちも、母親が紅茶を入れて自分の帰宅を待っていてくれたという記憶を共有しているが、同じことを自分の子どもにしている人はほとんどいない。にもかかわらず、働く母親たちに今も問題を投げかけているのは「ランチタイム」である。

オランダの小学校には、給食がない。「学校は勉強を習うところであって、生活する場でも、働く親のために子どもを預かる場でもないから」というのが理由だが、一般に1時間あまりの昼休みが設定しており、その間に生徒たちは自宅に戻って昼食をとることになっている。低学年の子どもたちは親が学校まで送り迎えすることになっているから、登校時と下校時、加えて昼食のための往復を数えれば、日に3回も親と子どもは自宅と学校の間を行き来することになる。とはいえ、共働き家庭の子どもは昼食時に帰宅することができないため、学校に「居残り (overblijven)」して持参した弁当を食べる。私が聞いた範囲では、帰宅組と居残り組が半々という感じのところが多かったが、その比率は学校や地域によってかなり異なるようだ。

キャリア女性向けのある雑誌の記事では、「子どもが居残りを嫌がり、他の子のように家でランチを食べたがる」ことを気に病んでいる母親の声が取り上げられていたが、⁴⁴ 実際働く母親の多くが頭を悩ませている。「いっそ子どもたちが全員居残りするシステムだったらいいのに」という声は、私の友人たちからもよく聞いた。

実は制度的には「継続的時間割 (continurooster)」という選択肢が存在しており、学校側がこのシステムを採用すれば、昼休みを短くして、全員が学校でお弁当を食べ、そのまま午後授業を続けることが可能になる。だが1997年の時点では、この継続的時間割を採用しているのは、全小学校の6%に過ぎなかった。その後どの学校でも、継続的時間割に変更するかどうかの論議は続いていたようだが、子どもが家で昼食をとれないことに対して専業主婦の母親が反対する一方で、昼休みが短縮されると、その分下校時間が繰り上げられるため、迎えが間に合わなくなるという理由で働く親からも反対が出たり、となかなか踏み切れない学校が多かったらしい。

ちなみに「お母さんが働いているからお昼に家に帰れなくてかわいそう」というイメージがつかまとう学校での居残り組であっても、母親の愛情の証としてとくに手をかけた弁当を持参することはない。ほぼ例外なくハムやチーズ、ジャム、チョコレートスプレーなどをはさんだサンドイッチ2組に丸のままの果物、といった具合で、高学年にもなれば子どもが自分で作ることもできる(図4)。他方、家で昼食をとる場合も普通はやはりサンドイッチであ

44 “Terug naar de theepot?” VB Magazine, Mei 1997. 記事のメインコピーは「紅茶ポットに逆戻り？」とある。

る。好きな種類のパンに好きなものを自分ではさんで食べる。⁴⁵

調査で出会ったオランダ人の親たちを見ていても、「母の仕事」の重要なポイントは手間をかけた料理ではなく、学校や習い事の場所への送り迎えのほか、子どもと一緒にいる時間を持ち、積極的にかかわるという側面にあるように思われる。



図4 オランダの小学1年生のお弁当

おわりに

17世紀に早くも家の内と外の境界を明確に意識し、掃除のあまりの徹底ぶりで他国からの旅行者を驚きあきれさせたオランダであるが、そこでは公私の空間的・観念的分離と女性の家事専門化が深く結びついていた。その後も、家の中をきちんと整え清潔に保つことは妻の主要な任務であり、主婦業をまっとうする上で重要な意味を持ち続ける。主婦としての仕事は、家の外で夫が従事する収入のための仕事と並置され、後者に劣ることのない女性向けの天職（beroep）にとらえられた。19世紀に進んだ家事の合理化や体系化も、家事がまぎれもない仕事とみなされていたことの証とみることができる。

家事をめぐる通念も実践も階層によってまちまちだった状況は、やがてすべての女性に対して、結婚と同時に家庭に入り家と家族のケアに専心するというライフコースが規範化される状況へと移り変わり、その規範は実践されるようになった。しかし1980年代以降は、結婚・出産後もパートタイムの形で就業を継続する女性が増え、もはや「主婦の仕事」つまり純粋な家事は、1人の人間が一日を費やすような職業には値しなくなっている。他方、「母の仕事」

45 ちなみに、2000～2001年時点でのオランダと日本における家事・育児関連時間の配分を比較すると、17歳以下の子を持つ女性の場合、「食事の管理」に費やす一日あたりの平均時間は日本の151分に対し、オランダは82分であった。「住まいの手入れ／整理」も大差はないが日本がオランダを上回る（57分と50分）。それにひきかえ、「子どもの世話」にかかる時間は日本が76分、オランダが92分であった〔品田 2007〕。

——母として子どもにかかわることの重要性は薄れていない。その結果、専業主婦、フルタイム就労の母親のいずれもが周縁的な存在となりつつある。

そしてパートタイム勤務と子育てを両立させようとしている女性たちは、「バランス」という言葉を頻繁に口にする。要するに、有給労働か、子育てかという二者択一ではなく、両方をバランスよくこなすことが理想であり、大半の女性は試行錯誤の末の自分の現状に満足している、という結果がインタビューからも各種統計調査の結果からも伺える。⁴⁶ だが、パートタイムの中でも子どもが小さい母親は週 20 ～ 27 時間（2 日半～3 日）を選択する比率がもっとも高いことからわかるように、そのバランスはどちらかというと子育てのほうに傾いている。つまり、ランチタイム問題に代表されるような学校の授業時間割と親の就労とが両立しにくい状況の中で、小学校の授業がない水曜午後は家にいて子どもと一緒に過ごすなど、子どものスケジュールに極力合わせた働き方を選んでいるのである。

と同時に重要なのは、「母の仕事」は必ずしも母親自身だけでなく、子の父親や祖父母にも担われているという事実である。紙幅の関係で詳述はできないが、母親が仕事に出ずに家にいる日、子どもが保育所に通う日のほか、「Papa dag」（父親が休みを取って育児を担当する日）や祖父母が孫を預かる日を織り交ぜた週間のケア・スケジュールを組んでいる共働き家庭は非常に多い。

かつて職業としての主婦業に従事し、長時間の家事労働をこなすことで、有給労働に従事する夫との間に明確な性別分業を行っていたオランダ女性たちは、現代においては「主婦の仕事」の一部を外注するか、もしくは家事の水準を下げるという方策を取りつつ、「母の仕事」と有給労働の間の正しいバランスを追求しているようにみえる。そしてより望ましいバランスを実現する上では、柔軟な働き方の制度化や保育施設の充実といった社会政策の後押しばかりでなく、「母の仕事」を母親以外の家族成員が積極的に担う状況が必要となったのだといえる。その意味で、家事労働の価値は低下しても、家内領域に付与される価値そのものは決して軽減していないことに注目する必要があるだろう。

引用文献

Allison, Ann (2000)

Permitted and Prohibited Desires, California University Press, 2000.

Bussemaker, Jet (1998)

“Gender and the Separation of Spheres in Twentieth Century Dutch Society: Pillarisation, Welfare State Formation and Individualisation,” in J. Bussenmaker and R. Voet eds., *Gender, Participation and Citizenship in the Netherlands*, Aldershot: Ashgate, 1998, pp. 25–37.

Cieraad, Irene (1999)

“Dutch Windows: Female Virtue and Female Vice,” in I. Cieraad, ed., *At Home: An Anthropology*

46 Nakatani 2010.

of Domestic Space, Syracuse: Syracuse University Press, 1999, pp. 31–52.

Davidoff, Lenore (1991 [1976])

“The Rationalisation of Housework,” in D. Leonard and S. Allen, eds., *Sexual Divisions Revisited*, London: Macmillan, 1991, pp.59–94.

De Mare, Heidi (1999)

“Domesticity in Dispute: A Reconsideration of Sources,” in I. Cieraad, ed., *At Home: An Anthropology of Domestic Space*, Syracuse: Syracuse University Press, 1999, pp.13–30.

De Ruijter, Esther (2004)

“Trends in the Outsourcing of Domestic Work and Childcare in The Netherlands,” in *Acta Sociologica* 47(3): 219–234.

Franits, Wayne (1993)

Paragons of Virtue: Women and Domesticity in Seventeenth-Century Dutch Art, Cambridge: Cambridge University Press, 1993.

Groffen & Hoitsma and Sjouk Hoitsma (2004)

Het Geluk van de Huisvrouw, Amsterdam: SUN, 2004.

Henkens, K., K. A. Meijer and J. Siegers (1993)

“The Labour Supply of Married and Cohabiting Women in the Netherlands, 1981–1989,” *European Journal of Population* 9: 331–352.

木本喜美子 (2005)

「労働組織におけるジェンダー分析」、姫岡とし子他編『労働のジェンダー化』平凡社、2005。

Kloek, Els, Nicole Teeuwen, and Marijke Huisman, eds. (1994)

Women of the Golden Age: International Debate on Women in Seventeenth-Century Holland, England and Italy, Hilversum: Verloren, 1994.

小林頼子 (2008)

「フェルメール作品に潜むジェンダーの視点」『ユリイカ』2008年8月号、pp. 175–95.

Laurence, Ann (1994)

“How Free Were English Women in the Seventeenth Century,” in E. Kloek, et al., eds., *Women of the Golden Age: International Debate on Women in Seventeenth-Century Holland, England and Italy*, pp. 127–35.

Moree, M. (1992)

Mijn Kinderen Hebben er Niets van Gemerkt: Buitenhuis Werkende Moeders tussen 1950 en Nu., Utrecht: Jan van Arkel, 1992.

Nakatani Ayami (2010)

“From Housewives to Combining Women: Part-time Work, Motherhood, and Emancipation in the Netherlands,”『日蘭学会誌』、2010.

Niphuis-Nell, Marry, ed. (1997)

Sociale Atlas van Vrouw, deel 4, Rijswijk: Sociaal en Cultureel Planbureau, 1997.

アン・オークレー (1980)

『家事の社会学』渡辺潤・佐藤和枝訳、松籟社、1980. (Ann Oakley, *The Sociology of Housework*, Oxford: Martin Robertson, 1974)

尾崎彰宏 (2008)

『レンブラント、フェルメールの時代の女性たち：女性像から読み解くオランダ風俗画の魅力』小学館、2008.

Oldenziel, Ruth and Caroline Bouw (1998)

“Huisvrouwen, hun Strategieën en Apparaten 1898–1998,” in R. Oldenziel and C. Bouw, eds., *Schoon Genoeg: Huisvrouwen en Huishoudtechnologie in Nederland 1898–1998*, Nijmegen: SUN, 1998, pp. 9–30.

Philips Nederland (1966)

De Nederlandse Huisvrouw, Eindhoven, 1966.

Plantenga, Janneke (1998)

“Double Lives: Labour Market Participation, Citizenship and Gender,” in J. Bussemaker and R. Voet eds., *Gender, Participation and Citizenship in the Netherlands*, Aldershot: Ashgate, 1998, pp. 51–64.

Portegijs, Wil et al. (2006)

Emancipatiemonitor, The Hague: Sociaal en Cultureel Planbureau, 2006.

Schama, Simon (1991 [1987])

The Embarrassment of Riches: An Interpretation of Dutch Culture in the Golden Age, London: Fontana, 1991.

Schuyt, Kees and Ed Taverne (2004)

Dutch Culture in a European Perspective, vol.4, Basingstoke: Palgrave Macmillan, 2004.

品田知美 (2007)

『家事と家族の日常生活』学文社、2007.

Sociale Atlas van de Vrouw (1983)

Sociale Atlas van de Vrouw, deel 4, Rijswijk: Sociaal en Cultureel Planbureau, 1983.

田中喜美子・鈴木由美子 (1999)

『「主婦の復権」はありうるか。』社会思想社、1999.

Tijdens, Kea (2000)

“Employment, Family and Community Activities: A New Balance for Men and Women. The Case of the Netherlands,” A Paper for European Foundation for the Improvements of Living and Working Conditions, 2000.

ツヴェタン・トドロフ (2002)

『日常礼賛：フェルメール時代のオランダ風俗画』白水社、2002.

Van Daalen, Rineke (1993)

“Van “Lekker Schoon” tot “Schoon Genoeg”: Veranderingen in de Schoonmaak van het Privé-huis,” in *Huishoudstudies* 3 (3): 10–19.

Van de Pol, Lotte C. (1994)

“The Lure of the Big City: Female Migration to Amsterdam,” in Els Kloek, et al., eds., *Women of the Golden Age: An International Debate on Women in Seventeenth-Century Holland, England and Italy*.

Van Deursen, A. TH. (1991 [1978])

Plain Lives in a Golden Age: Popular Culture, Religion and Society in Seventeenth-Century Holland, Cambridge: Cambridge University Press, 1991.

Van Eijl (1994)

Corrie Het Werkzame Verschil: Vrouwen in de Slag om Arbeid 1898–1940, Hilversum: Verloren, 1994.

Wilke, Magrith (1998)

“Kenniss en Kunde: Handboeken voor Huisvrouwen,” in R. Oldenziel and C. Bouw, eds., *Schoon Genoeg: Huisvrouwen en Huishoudtechnologie in Nederland 1898–1998*, Nijmegen: SUN, 1998, pp. 59–90.